カンボジアでの調査（近況報告）

雨期が終わった2008年11月からのカンボジアでの調査についてご紹介します。

まず12月１日に恒例のアンコール遺跡に関する国際会議が開催されました。この会議には研究所から４名が出席する予定でしたが、11月25日にバンコク国際空港が民主化要求デモによって占拠され、バンコク経由のタイ国際航空が全便欠航となりました。２名が出発できなくなり、善後策を協議した結果、今次の調査は中止しました。会議には先に現地入りしていた筆者を含む２名が参加しました。ハンガリーによるコー・ケー遺跡での修復開始、アプサラの新事務所開設など新しい話題の多い会議でした。

発掘調査は中止になりましたが、12月６日には、㈱タダノから贈呈されたラフテレーンクレーンが現地に到着し、西トップ寺院で待望の試運転をおこなうことができました。

２月には保存科学の調査チームが現地入りし調査をおこなうとともに、考古チームは西トップ寺院の発掘調査で出土した遺物の整理作業を開始しました。予想以上に中国陶磁が多く、優美な白磁合子や青磁の椀皿類が確認されています。中国陶磁が、どの時期にどれだけもたらされているかは不明で、共に出土した土器・陶器に関してもわからないことが多く、今後の整理作業が期待されます。また大量の瓦も注目されます。多くは須恵器のように堅く焼き締まり、表面には厚く緑釉がかかっており、ポストアンコール期の瓦研究にまたとない資料となることでしょう。

この事業は今、遺跡の状態の変化に伴って大きな転機にさしかかっています。今後も、研究所で慎重に検討を重ねながら進めていきたいと思っています。

（企画調整部　杉山 洋）

西トップ寺院出土瓦の調査

ベトナム政府より表彰される

２月９日、ベトナムハノイ市の文化スポーツ観光省において、表彰式がおこなわれました。主として2003年度から文化庁を中心におこなってきた、伝統集落保存への協力に対して、ベトナム国文化スポーツ観光大臣より、日本側の文化庁、奈良文化財研究所、昭和女子大学、国際協力機構（JICA）、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）、国際交流基金が表彰されたものです。なお、集落調査の成果については、すでに『ハタイ省ドゥオンラム村集落調査報告』として刊行しているところです。

表彰式には、当研究所の田辺所長をはじめ、坂東昭和女子大学長、西村ACCU奈良事務所長、JICAおよび国際交流金のハノイ事務所長と、各機関の長が列席して盛大におこなわれました。田辺所長には、チャン・ティン・タン文化スポーツ観光副大臣より、表彰状および記念品が授与されました。所長からは、先日完成した調査報告書の英訳版を贈呈しました。

表彰式前の夕食会および当日の昼食会においては、ベトナム側の行政機関および研究機関の要職の方々や、国際協力をおこなう日本側各機関の方々との連携関係を構築することができました。

また、ベトナム側の配慮で、タンロン遺跡の見学をおこなうこともできました。

２月11日には、ベトナム中部のホイアン市において、期を同じくして訪越しておられました皇太子殿下にお会いする機会を設けていただきました。奈良文化財研究所がベトナムの文化遺産保存事業に協力しているとの紹介をベトナム政府から受け、殿下より「良いお仕事をされていますね」とねぎらいのお言葉をいただきました。

（都城発掘調査部　島田 敏男）

ハノイでの表彰式（左：副大臣，右：田辺所長）